

著者から読者へ 「物である本」のインフラを守るために

桂川潤

桂川潤著

本は物である

装丁という仕事

本は物である
装丁という仕事



桂川潤

「本」は生かされたか
「本」は死なされたか
「本」は愛されたか
「本」は憎まれたか
「本」は笑われたか
「本」は泣かれたか
「本」は怒られたか
「本」は驚かれたか
「本」は怖れたか
「本」は驚かれたか
「本」は怒られたか
「本」は泣かれたか
「本」は笑われたか
「本」は憎まれたか
「本」は愛されたか
「本」は死なされたか
「本」は生かされたか

A5変判・253頁・2520円
新曜社
978-4-7885-1210-8

立ち行かな
くなる。ど
んなに「紙
の本」を欲
しても、イ
ンフラが消
滅すれば手
の打ちよう
がない。
本書第二
章は、担当
した「吉村昭歴史小説集成」
の製作過程を、装丁家とし
ての視点で詳細に追ったり
ポットだ。「物である本」を
つくるプロセスは、「生態
系」とも言うべき精妙な連
携を支えられている。そんな
な製造業の現場で今「職人
技の継承」だけでなく、そ
れを下支えする「機械の維
持」が危機に瀕している。状
況は「待ったなし」なのだ。
本書は、テキストを「物
質」書物」として立ち上げ
ていく「装丁」という作業
を切り口に、「物である本」
をさまざまな角度と具体例
から分析しつつ、書籍電子
化を見据えた書物論、出版
文化論を試みたものだ。

物の身体性」と題して、
岩波新書『本は、これか
ら』（池澤夏樹編）に寄
せた。『本は、これから』
は、△書籍電子化▽を焦点
に、懐疑派から推進派まで
三七名が、本の過去と未来
を俯瞰し考え抜いた書き下
ろしエッセイ集で、本好き
には興味つきない内容とな
っている。わたしが「物で
ある本」を強調するのは、
単なる「懐古趣味」からで
はない。「読書」は、人間
の「歴史」と「身体性」に
深く根ざす営みだ。「読書」
は本文のテキスト text
を視覚的に追うだけの行為
にとどまらず、自身を鳥瞰
しながらコンテキスト con
text（状況・文脈・
背景）を五感で感受し、自
己編集（松岡正剛）してい
く行為なのだ。そんな「読
書」には「物である本」が
欠かせない。その理由を

書籍の全文を検索対象と
する「デジタル・ブックス」

が始動し、書籍電子化の動
きは勢いを増しつつある。

iPad を愛用する装丁家
のわたしは、けっして電子
書籍全面否定論者ではない

が進めば、いずれ「物である
本」が存亡の危機に瀕する

という強い危機感を抱いて
いる。「電子書籍と紙の本
が共存すればいい」と多く

の人が考えているが、本づ
くりの最前線から見ると、

出版・流通という「上部構
造」以上に、いま危機に直
面しているのが、薄利多売

で「紙の本」を支えている
「下部構造」だ。すなわち
製紙・印刷・製本といった

インフラ製造業は、「紙
の本」が半減してしまえば

縮した小文を「装丁」と入書
ゅん氏＝装丁家）
なお本書のポイントを凝
と想う。（かつらがわ・じ
ひ手にとっていたければ
の行方を案する方々に、ぜ
述した。「本」や「読書」
は、これから』の二冊に詳
『本は物である』と『本
欠かせない。その理由を
書」には「物である本」が
く行為なのだ。そんな「読
己編集（松岡正剛）してい
背景）を五感で感受し、自
context（状況・文脈・
しながらコンテキスト con
を視覚的に追うだけの行為
にとどまらず、自身を鳥瞰
は本文のテキスト text
深く根ざす営みだ。「読書」
は本文のテキスト text
を視覚的に追うだけの行為
にとどまらず、自身を鳥瞰
は本文のテキスト text
深く根ざす営みだ。「読書」